

江上波夫篇の開発・制作について

齊 藤 征 一

I. 企画の狙い

江上波夫氏が「騎馬民族征服王朝説」を提説して40年余。

一つの学説が世に出るとき、それはその人が心血を注いで研究し、生命を吹き込んだものに相違ない。

東洋史学、考古学の泰斗、江上波夫氏が「農耕民族と遊牧騎馬民族」を主要な研究テーマとするに至った背景を追うことにより、氏の学術研究の軌跡とその世界を多様な映像手法で探る。

II. 交渉の経緯

企画が承認されて間もない5月下旬、高杉部長、古川ディレクター、それに私の三人で江上波夫先生に会って出演を依頼した。場所は東京・池袋サンシャインビルと隣り合わせの文化会館七階にある古代オリエント博物館。江上先生は「学術の記録」の趣旨説明を聞くと、直ちに出演を快諾された。早速、スケジュール調整を開始した。江上先生の手帳は既に年間を通じて予定が詰まっていたが、7月13日、8月1日、9月12日、13日、それに10月23日、24日、25日を当方の取材日として割いてもらうことが出来た。「学術の記録」～江上波夫篇～の中に取りあげる内容としては、①東洋史学、考古学という学問を通して東アジア、特に蒙古との関わりあいとそこへの思い。②「騎馬民族征服王朝説」に到達した背景③古代における東西文化交流④農耕民族と遊牧騎馬民族について⑤私と学問……新しい世界史を求めて。の5項目が打ち合わせの結果挙げられ、これに沿って準備を進めることとした。

最初に着手したのは聞き手の設定である。候補者として数人の歴史学者、研究者をあげたが、江上先生の要望もあって、古代オリエント博物館主任研究員の林俊雄氏（41歳）に決定した。林氏は江上先生に長い間、師事しており、東アジアに通暁している。この林氏の起用は江上波夫先生の学問の世界をとらえる上で、大きな効果があったと思う。6月下旬、林氏と質問項目の詰めを行ない、洩れのないように心懸けた。予定質問項目は前述した内容との関連で次のものを決めた。④騎馬民族征服王朝説を提説した背景⑤東洋史学、考古学を通しての東アジアとの関わりあい、そしてそこでの研究調査活動について。⑥家族について、そして学問の世界を志した動機について。⑦古代の東西文化交流はどのように行なわれたのか。⑧農耕民族と遊牧騎馬民族の違い。⑨江上先生は学問をどう捉え、実践してきたのか。以上を柱とし、補足質問はその都度ということにして収録に臨んだ。また、聞き手の林氏にはブレーンのような役割も果たしてもらった。江上先生関係の資料収集、読むべき書物などは林氏から入手したものが多い。

Ⅲ．立脚点と構成

今回の江上波夫編を制作するに当たり、一番最初に悩んだのは、立脚点をどこに据えるかということであった。人物が主軸か、学術が主軸か、それとも両方が軸になるのか。結論から言うと、江上先生の場合では、学術の世界を主軸として制作することとした。人物像もきわめて魅力的だが、それにとらわれると肝心の本体を見えにくくするのではないかと判断したからである。人物像は学術研究のプロセスの中で自然に見えてくるのではないかと思われた。従って、前述の様に質問項目は学術関連のものが多くなった。この基本的スタンスが決まれば、次の課題は構成である。映像作品のストーリーは構成によって左右される。従って、よりよいものを目指して、構成は何回も練り直し、書き直しをすることが多い。いわば、文章作法における推敲によく似ている。今回の構成案は第4稿まで書いたが、最後迄悩み、迷った点が多々ある。

その一つはストーリー展開の上で、どのように設定するかということである。というのは、今回の取材で江上先生には有名な「騎馬民族征服王朝説」の他に、もう一つ重要な業績があることを知り、これを構成上、どうすべきかで未だに腐心しているところである。その業績とは東アジアで初めて建てられたと伝えられていた「ローマ教会」の遺跡を内蒙古のオロンスムで発見したことである。この発見は東西文化交流史において重要な意義を持つものであり、欧米の学界に「江上」の名前が知れわたるところとなった。更に、この発見は欧米から注目されたことによって、戦後、日本の考古学界が国際的な活動の足場を拡大する端緒となった。「騎馬民族征服王朝説」に劣らぬこの業績をどう取り扱うかが今回の課題の一つである。

Ⅳ．演出上の留意点

当初、構想したものは、★CGを使った地図の作成、★ナレーターの起用、★資料の重視の三点である。CGはその最大特色である三次元を描く機能をもつ。これによって、年代の違う地図を作成したら効果が出るのではないかと考えた。ナレーターの起用は状況説明や補足説明を必要とする部分があり、女性にした。もう一つは資料の多用である。これは「学術の記録」の補強材料として、思い切って多数の資料を入れ込むこととした。取材先の東京大学東洋文化研究所には、江上先生が戦前、内蒙古地帯を調査した際に持ち帰ることができた土器片や細石器類、及び戦後のイラン・イラク調査団団長時代に相手国政府の許可を得て持ってきた土器等が多数保存されている。また、研究所の中に江上先生の処女論文が掲載されている雑誌「歴史学研究」(1934年4月)もあった。写真類は方々に散逸していたが、内蒙古調査時のものは江上先生の熱海の別荘から見つかった。その他、当時のノートや自筆の地図(これは古代オリエン特博物館で)もあり、こうした資料を多用することが今回の試みの一つである。

Ⅴ．制作～スケジュールと条件～

第1回 1989年7月13日(木) インタビュー形式、2時間録画、古代オリエン特博物館にて

第2回 1989年8月1日(火) インタビュー形式、3時間録画、古代オリエン特博物館にて

第3回 1989年9月12日(月)～13日(火) 江上先生が「考古学」と出会った地、千葉県勝浦市
興津町、1時間録画

第4回 1989年10月22日(日)～24(火) 愛知県犬山市「野外民族博物館リトルワールド」にて

2 時間録画

このほか、12月に古代オリエント博物館、2月に東京大学東洋文化研究所でスチール撮影を実施した。

第1回と第2回のインタビューは、古代オリエント博物館館長室で実施した。江上先生は一つの質問に対して一時間も話をされるものがあったりして、話の内容がやや質問テーマからそれることがあった。しかし、自分の研究について語る江上先生の熱意に圧倒され、途中で遮ることはせず、そのまま、録画した。先生が話す度に地名、人名、年代が淀みなく出て来、その博識ぶりも発揮されたと思う。博覧強記の人である。また、今回の話は現地を実際に見た者でなければ語れないことや、体験に基づくものが多かったように感ずる。第3回の勝浦市興津町では、その健脚ぶりに驚かされた。我々を案内するということがあったにせよ、実によく歩き回られたと思う。考古学との最初の出会となった洞窟、そして、中学時代に療養生活を送ったお寺（ここは改装中で中へ入ることは出来なかった）、や町の中などを一日中、歩き回った。江上先生の足を触らせてもらったが、太くて堅い足であった。

第4回は江上先生が館長をしている野外民族博物館リトルワールドでロケを実施した。ここでは、先生が世界各地から集めた物があり、それを基にしてお話を伺うことを主な目的としていた。江上先生は自ら民族衣装を着用して説明するなど、大変、サービス精神を持っておられることがわかった。そうした「人間・江上波夫」像はこのリトルワールドでのロケでかなり捉えることが出来たと思う。というのは、予期せぬ収穫があったからである。ここの福本美知子研究員は江上先生と幾度か遺跡調査に同行したことがあり、その時のエピソードを語ってくれたが、それは、將に江上先生の人柄を彷彿とさせるに十分なものであった。このエピソードは「学術の記録」の中に入れこんだ。

以上、4回の取材を終えたが、江上先生は大変、早口であった。人の倍近い早さだったと思う。もう一つは、やや声が細くなられ、聞き取れない所もあった。この点は聞き手の林俊雄氏に後日、相談にのってもらい、活字記録の方は欠けることなく、整える事が出来た。スケジュールの面では、余裕をもたせてもらい、大変、恵まれたと思っている。というのは、江上先生は83歳の高齢ながら、未だに著作、講演、海外での遺跡調査に関わっておられ、なかなか空いている時間が無く、当方が江上先生の都合に合わせるしかなかったからである。また今回は収録時にカメラを2台（第1回と第2回）使用したが、これにより、江上先生の表情をより豊かに捉えることが出来たと思う。しかし、ポストプロダクションの面で見ると、VTR編集室の空きがないのには大いに制約をうけた。

VI. 「江上波夫・学問の世界」～取材上から捉えたもの～

江上先生の学問の世界はとてつもなく大きく、かつ広い。取材が進むにつれ、なお一層その感を深くしている。そうした中で私なりに捉ええたものを以下に要約したい。

まず、第一に江上先生の学問観である。

その学問観は読破した膨大な書物から得られ、構築されている。とりわけ、ダーウィンの「種の起源」、メンデルの「植物の雑種に関する実験」、モーガンの「古代社会」、エンゲルスの「家族・私有財産・国家の起源」、マルクスの唯物史観関係の多くの著作、タイラーの「原始文化」、

更には司馬遷の「史記」、ヘロドトスの「歴史」などの著作を通して流れているものは、その著者たちの学問への情熱であり、人間への強い関心であり、パイオニア精神である。それらは、著作自身が学問的には過去のものとして、葬り去られたとしても、読む人をいつまでも魅了せずにおかないものである。だから、古典の古典たる所以である永遠性、あるいは、半永久の生命力は作品と作者が不二一体となるほど徹底して人間性が投入がされた結果のものに相違ない。これらのことから導きだされるのは、＜学問は人なり＞ということである、と江上先生は強調している。

そして学問の創造をめざすのに最も必要なことは何か。

これに対し、先生は「私は＜問題意識＞こそ学問の死生を分かち鍵ではないかと考える。他人からの借り物ではない、自己の幅広い経験と知識の中から芽生え育まれた独自の問題意識があってこそ、それが核となって、恰も、化学結合のように、あらゆる素材、見聞、思惟がそこに反応し結合して一つの有機的統一体を成す。そして、その蓄積によって、更に大きな統一体が出来上がっていく過程を経て、何人の追従も許さない磐石の独創的な学問の世界が構築されるものと考えている。ニュートンは例のリンゴが落ちたのを見ただけで、どうして引力を悟ったか、と人に問われたとき“常にそのことを考えているので”と答えたという。一つの問題意識を常にもっていれば、単に果実が落下するのが目にとまっただけでも豁然として解決を見出すことがある。というより、常に問題意識をもち、考えていなければ問題の解決はないという意味にこの言葉を解して、私はこれを座右の銘としてきた。常に問題意識を失わず、自力でそれを解決することの積み重ねから、自分という「人間」が入った、いつまでも生命を失わない偉大な学問が創造されるのであろう。」と答えると共に、自分自身の歩んできた道を振り返り、「私は、もとより探究の途上にある身であるが、私を絶えず触発し、行動させ、思考させてきた一つの問題意識があったことを認めないわけにはいかない。もしも私がそれに逢着しなかったなら、現在の野心的な探究の一部を成す、一般に知られる「騎馬民族征服王朝説」も生まれなかったであろうと思われる。私は大学では「東洋史」を専攻した。最初に研究課題としたのは、「北方ユーラシアの遊牧民の文化」である。卒業論文には「漢代匈奴の文化」を選んだ。しかし、当時は東洋史、否、世界史からも取り残されていた北方ユーラシアの遊牧民が南方ユーラシアの農耕民と並んで、世界史を構築した二本の根幹の一つであり、同時に東洋と西洋とのつなぎ目を成したものであり、古代の日本史とも深く関わっていたことまでは思い及ばなかったのである。要するに私の問題意識は、匈奴を含む古代ユーラシアの遊牧民から出発しているのである。それに、より明確な方向づけをしてくれたのが北京留学であった。北京大学文學院の傍聴生として、また万里の長城内外の華北・内蒙古を調査して得た体験、その間の生活で見聞したこと、肌で感じたことが、今日に至るまでの私の学問生活の起点、終生の問題意識の萌芽となったのである。」と述べている。

次に、江上先生の研究方法を見ていきたい。

これも江上先生を知るうえで欠かすことの出来ないものである。先生は、歴史の復原をどのようにして行なうかということは、歴史家に課された、最も基本的な、しかも不可避な問題であるとし、そのためには大体、三通り或いは三段階ぐらいの研究法があるという。

第一の、あるいは第一段階の研究法は史料の部分的復原である。

歴史は過去のものでその断片が史料として残っているにすぎない。それでその残っている史料を出来るだけ沢山さがしだして、正しくつないでいって、より大きな史料にする。土器でいえば、壊れた断片をつなげるものはつないでいく。そうしてより大きな断片にすると、小さなものより全体の形に近づいてゆく。しかし壺の全体の形がそれによって出来上がる、すなわち完全に復原されるということは、遺物のばあい滅多にない。

第二の、或いは第二段階の研究法は比較研究あるいは分類的研究である。史料を他の史料と比較して、全体像における相関関係やその占める位置を設定して、全体像の仮設作業を行なうのである。土器でいえば、多くの断片を比較観察して、これは口縁部であるとか、把手であるとかをきめ、さらに個体別の差別を行なって与えられた土器片の中から不完全な状態のままで、大小いくつかの土器の存在、それぞれの全体形を仮定復原するのである。考古学にとっては、比較的容易なばあいが多い。それは、そのような比較・分類をすでに何回となく繰り返しており、その人の頭脳の中に土器形式のコルプス（集成図）が入っていて、与えられた土器片をそのコルプスに当てはめてそれが全体に占める関係位置を正當に想定することができるからである。そうでないと、土器の蓋を身としてしまうばあいもありうるわけである。しかし、そのような土器形式のコルプスは多くの土器片を比較研究した結果、いわば自然にでき上がった全体像で、従って、より多くの土器片が加われば、それとの比較研究で、さらにより大きい、より詳しいコルプスになってゆくべき性質のものである。従って比較研究とは、全体像の仮設作業にほかならない。

第三は総合的研究である。歴史の仮定的復原作業はいちおう出来上がっても、それはあくまでも仮設作業であって、同じ問題を他の方面から別な史料で、いくつか仮設的復原作業を繰り返してみても、その結果がみな矛盾なく組み合わさって、はじめて真の歴史の復原となるのである。

以上三つの、あるいは三段階の研究法は、現実には分業的に行なわれているばあいが多い。しかしその場合には、それぞれの研究法に従っている人々が相互に連絡を密にして、他を理解しつつ共同の目標たる真の歴史の復原に向かって研究を進めてゆく共同研究の体制が必要である。古代日本の歴史の復原にも、以上三つの、あるいは三段階の研究が十分に遂行されなければ、歴史的実在としての古代日本の真の姿をとらえることは不可能であろう。江上先生はユーラシアにおける農耕民族の歴史的諸類型と騎馬民族の歴史的諸類型とを集成し、ユーラシアの農耕民族と騎馬民族の歴史の仮設全体像の作成を試みてきたのである。そして、この両種の仮設的全体像と古代日本の歴史とを比較研究した結果、農耕民族の歴史的類型は弥生式時代から古墳時代前期の日本にはきわめてよく即応するが、古墳時代後期（応神朝以後の大化前代）には本質的には合致しない。一方、後者は騎馬民族の歴史的類型、とくに征服王朝のそれにすこぶるよく照応することを知った。その比較研究による結果は古代日本の歴史は騎馬民族型と、とくに征服王朝型を示したのである。江上先生はこの第二のタイポロジーを得意とするだけでなく、様々な分野における豊富な知識を第三の総合的研究にも生かしている。それだからこそ、江上先生の学説は強固なものとなっている。以上、「江上波夫・学問の世界」の骨格に迫ってみた。個々の内容分析的なものは別の研究に譲りたい。

VII. 取材後記

今回、制作したものは、江上先生の巨大な学問の世界を大胆にも描こうとしたものである。そうした主目的からそれて残ってしまったものがある。それらの中から、江上先生の人間的な側面に触れた部分を制作余話として記しておきたい。

取材中に出会った人達が言うように、江上先生はなかなか接触できない人である。今回の「學術の記録」で交渉を開始した時もそうであった。古代オリエント博物館の林主任研究員は「江上先生は遺跡調査の関連などで海外へ出ていることが多く、そのほか、講演があったり、溜まっている原稿の執筆もあります。そして時には出版社によって何日もホテルに閉じ込められ、原稿を書いていることがよくあります。」と、その事情を説明してくれた。その忙しい江上先生と犬山市の取材ではずっと一緒に行動することが出来た。江上先生は酒もタバコもおのみにならないが、食事中やお茶を飲んでいるときは実によくお話しをされた。その時に先生は足が丈夫であること、いまでも時には徹夜で原稿を書いたりすることなどを話されたが、そうした話の中で「東大教授を定年で退官したとき、退職金は500万円でしたが、その内の200万円を本代の支払にあてた。」と言われた時には頷けるものがあった。実は犬山市のロケの前に、江上先生の自宅へお邪魔したことがあるが、家の中は書籍類で足の踏み場もない程であった。そして、まだ新品のように見えるステレオプレーヤーには「すてる」と書かれた大きなはり紙がしてあった。その時、そのステレオがなくなった後には本の山が築かれるに違いないと感じたからである。その後、伺った熱海の別荘でも更に多くの本が書棚からはみだし、階段の幅をも狭くしているのであった。「ここにある本は全部お読みになったものですか」と尋ねると「すべて読んだものです。後で何か必要な事が起きたときは、あの本に書いてあったという事がすぐわかるんですよ。」と言われた。江上先生が博学であることはよく知られているところであるが、それにしても美術、文学をはじめ様々な分野の本が多いのに驚かされた次第である。

江上先生はまた、その退職金の中の200万円をあてて「流沙海西（中央アジアと西アジアをさす）奨学金制度」を作った。「日本が遅れているこの分野の研究を発展させるために創ったもので官、公、私を問わず各大学に依頼してあり、毎年、優秀な論文に対し、10万円を出すというものです。原資がなくなったらこの制度は終わりということにしていたんです。ところが企業などからの寄付金があったりして、その後も続いており、少し前から15万円になりました。そうした優秀な論文は本にまとめられ、現在までに3冊が出版されています。ごく最近では外国のある企業から350万円の寄付がありました。」と江上先生は温顔を一層ほころばせて言う。

こうした話が終わり、次のロケ地点へ移動するため車に乗ると直ちに眠りにつかれ、到着すると、ちゃんと起きておられた。東京大学イラク・イラン調査団で同行したことがある東京大学東洋文化研究所の古山学さんは「先生は仕事の区切りがつくとよく眠られることがありました。ご自分でも寝だめ、食いだめが出来るんだとおっしゃってました。」その古山さんが同行時に感じたのは、江上先生は非常に好奇心が旺盛だということである。「ちょっとそこまで行ってみようと言われたのでついていったら、遙か30分もかかる所でした。そこは海水から塩を作っている作業場だったんです。先生はその作業をじっと興味深そうに見ておられました。」古山さんのいる東京大学東洋文化研究所の中にある資料室の一つは殆ど、江上先生海外での遺跡調査の際、その国の許可を得て持ち帰った出土品でいっぱいになっている。「これは貴重な財産です。

歴史や考古学の研究者はここに来て資料を直接手にとって調べたり確かめたりすることが出来るんです。ガラス越しのものをみただけでは本当はよく判らないんです。実際に手にとって見れるのは大変な強味なんです。」と古山さん。遺跡からの出土品は持ち帰ることがほとんど出来なくなった現在、江上先生が集めた土器片や細石器類はたいへん貴重なものといえよう。以上、江上先生の輪郭をつかむ上での一助にと思い、仄聞したものを記した。

取材を終えた今、江上波夫先生という碩学に接することが出来たのは私にとって非常に幸運であり、得るところが多かった、と改めて思っている。

その一つは江上先生の「生涯現役」の姿勢である。古代オリエント博物館でのことであるが、江上先生にちょっと時間の余裕ができたとなると、若手研究者たちがやって来て先生を取り囲んで離さない。江上先生は資料を点検したり、或いは議論に加わってアドバイスをする。「研究」から決して離れることのない生涯現役の姿をそこに見た思いがした。

もう一つは不撓不屈の精神であり、学問への情熱である。戦前、先生は中国や内蒙古の危険区域を生命の危険をも顧みず、研究調査のため、幾度となく踏破した。そうした戦争による危険だけではなく、厳しい自然との闘いも強いられている。そうした困難や障害を乗り越えたことが一つの大きな成果となって報いられた。内蒙古のオロンスムにおける「ローマ教会堂」遺跡の発見がそれである。このことによって、江上先生は戦後、いち早く欧州各地に招かれ、この研究調査についての講演をして回った。そして、欧米先進国が先行して遺跡調査をしていた西アジア諸国から調査の依頼が次々舞い込んでくることとなったのである。しかし、この発見のように研究の成果が直ちに得られるものは非常に少ない。招かれた西アジアでの発掘活動および調査研究は30年以上の歳月をかけて、未だに継続しているのである。

江上先生は今年からまた先生の学術調査活動の出発点である蒙古へ、再び足を運ぶ。今回の取材中、口癖のように蒙古人の人柄の良さを語っていた江上先生。その蒙古が再び先生を呼んでいる。先生のご健闘をお祈りしたい。

1. オープニングタイトル
外房の波、土器、ガラス器
2. イントロダクション
海岸を歩く江上先生
(江上先生トーク)
3. 「騎馬民族征服王朝説」の背景
中公新書 (ナレーション) ▶ 騎馬民族征服王朝説の要旨
先生の顔 ▶ 昭和23～24頃の日本史
「歴史学研究」 ▶ 学説発表の背景と発表形式
(江上先生トーク)
4. 東洋史学・考古学研究の足跡
(ナレーション) ▶ 江上先生の研究の概要
著者、論文
略年譜
収集資料
5. 学問の世界へ ～その動機・環境～
家族写真 (ナレーション) ▶ 少年時代そして家族
ヘディン及び、本 (江上先生トーク)
勝浦市興津町
(ナレーション) ▶ 考古学との出会い
掲載雑誌
大学時代 (ナレーション) ▶ 専攻、卒論
恩師
池内先生 (江上先生トーク)
浜田先生
6. 踏査行 ～内蒙古・大草原をゆく～
略年譜 (ナレーション) ▶ 時代背景、東亜考古学会
新京の江上先生
(江上先生トーク)
蒙古大草原 (ナレーション) ▶ 生涯にわたる研究テーマとの出会い
(江上先生トーク)
7. 「オロンスム」での発見
地図 (ナレーション) ▶ 東西文化交流史上での意義
オロンスム
自筆の地図

オロンスムⅠ（本）

（江上先生トーク）

8. 古代オリエントへ ～古代からのメッセージを求めて～

（ナレーション）▶オロンスムの縁、戦後の研究活動

▶学際的研究法の必要性

調査地点

調査報告書と資料

（江上先生トーク）

9. 考古学資料館設立の夢

古代オリエント博物館 （ナレーション）▶江上先生の夢、生涯現役

リトルワールド （江上先生トーク）

（福本さんトーク）

10. 学問とわたし

江上先生 （ナレーション）▶江上哲学

詩集「幻人詩抄」 ▶詩集朗読

11. エンドタイトル

江上先生のさまざまな表情に Wって